

全国中学生人権作文コンテスト宮崎県大会 「最優秀賞」を受賞しました

2018
December
6

12月5日(水)、本年度の「人権に関する作品」と「全国中学生人権作文コンテスト県大会」の授賞式が宮崎県庁にて実施されました。

「全国中学生人権作文コンテスト」において、中学3年生の仲本愛さん(高鍋東小出身)の作文が最優秀賞に選出され、12月6日(木)の宮崎日日新聞に作文「私は誓う」が全文掲載されました。

なお、この作文は12月7日(金)までイオンモール宮崎に、16日(日)まで宮崎県立図書館に展示されます。

18年(平成30年)12月6日 木曜日

宮崎日日新聞

県人権作品、作文コンテスト 仲本さん(宮崎第一中)ら最優秀



「人権に関する作品」の授賞式で表彰状を受け取る受賞者(5日午後、県庁)

本年度の「人権に関する作品」(県など主催)と「全国中学生人権作文コンテスト県大会」(同)の授賞式は5日、県庁であった。281校の小中高校生から作文と図画、ポスター合わせて1万1535点の応募があり、最優秀賞8点、優秀賞23点、宮崎日日新聞社賞1点と奨励賞40点が選ばれた。(22面に特集)

式には、受賞者のうち31人が出席。郡司行敏副知事が「いじめや差別をなくしたいというメッセージがしっかりと伝わるよう願っている」とあいさつ。全国中学生人権作文コンテスト県大会で最優秀賞に輝き、全国大会に出品された宮崎第一中3年の仲本愛さん(15)が「それぞれが認め合える社会であり続けるよう、発信できる人でありたい」と決意を述べた。

優秀賞以上の作品は宮崎市イオンモール宮崎(7日まで)と同市の県立図書館(16日まで)に展示される。仲本さん以外の最優秀賞、宮崎日日新聞賞の受賞者は以下の通り。(敬称略)

【作文】小学生・3年生以下の部(山下いち菜(三納小2年)▽同・4年生以上の部(黒川蒼太(宮崎南小5年)▽高校生の部(堀田奈央(都城西高1年))

【図画】小学生・3年生以下の部(崎田大直(飫肥小3年))

新聞掲載

【ポスター】小学生・4年生以上の部(松山ひかる(飫肥小5年)▽中学生の部(山根麻椰(鶴戸小中・中学1年)▽高校生の部(荒田梨乃(佐土原高1年))

【宮崎日日新聞社賞】今村繪花(宮崎大付属中・3年)

(川原智美)

★「デジタルタタリプレみや」にも掲載

宮崎日日新聞(12月6日掲載)

全国中学生人権作文コンテスト宮崎県大会 「最優秀賞」作品 全文掲載

最優秀賞

「努力って報われないものなの」「理不尽な思いはしなくてはいけないものなの」。学校の帰り道、空を見上げながら私はつぶやく。中学三年になり、男女テニス部の副キャプテンを務める私は、部活の中でも何かと人の犠牲になることも多く、勉強に至っても、「今が頑張る時、今を乗りきれ」と先生には呪文のようには言われるが何だか心がいつも薄い雲に覆われているようにすっきりしない。家に帰っても、無力感に襲われ表面だけが評価される学校生活に、少しうんざりしていた。

そんな私に、父が一言「何か忘れていないか」と小学生の時にももらった葉を出してきた。それは、沖縄の祖父母の家に帰省した時、訪れたハンセン病の療養施設「愛楽園」でいただいた物だった。青い海に真っ赤なハイビスカスが描かれた小さな小さな葉。父が大事にとっていてくれたのだった。その葉を見つめあるとき誓った言葉を思い出した。「私は、忘れない」と。

この夏休み、父に頼んで、鹿児島にあるハンセン病療養施設「星塚敬愛園」に連れて行ってもらったことにした。

四年前は、大好きな沖縄の海で泳ぐことを目的に出かけた途中に、父が私を連れて行

宮崎市・宮崎第一中3年

仲本 愛さん



私は誓う

つてくれたのが「愛楽園」だった。正直、沖縄の夏を満喫しようとはりきっていたのに、一気に気持ちがいっぱいになりました。今頃は、全く違う。自分の意思で自分から頼みでの訪問だった。鹿児島までの道よりも前は違う。なぜなら、私が忘れてしまっていた答えを探しに行かため道。車中でも、家族とほとんど口をきくこともなく、母が聴いている楽しい音楽さえもわずらわしく思えるほど心が緊張していた。父の運転する車が、「星塚敬愛園」に到着した。入口の前で立ち止まると、父から「愛が決めたのだから」と背中を押され父母よりも先に入り、事務所の方まで告げた。事務所の方がとても穏やかな表情で「よく、来てくださいました」と言っていて、早速案内を案内してくださった。社会交流会館でみせていただいた「ハンセン病の歴史」。不治、業病、恐怖、遺伝といった言葉で忌み嫌われ、排除されてきた患者の方々と、ハンセン病かもしれないと疑われただけで、有無も言わず療養所へ収容され、外との接触を一切たれてしま

う生活を強いられる。感染力も弱く治癒可能な病気となつたと力説しても、正しい情報に耳を傾けようとする人は少なく、声をあげればあがるほど偏見や差別の目にさらされてきた方々。当事者の方々の生の声が私の心の奥深くにつきささった。園内でみた、初代火葬場や収容門。患者の方々を収容する場所を区切っていた所にも立ってみた。幸せに暮らしていたはずの家族を引き裂いた場所。私の胸ははりさけそうになり、隣に立つ母の手をぎゅっと握った。人ががつくった政策に人が苦しめられ、そんな事実がそこにはあった。慰霊碑の前では、あつてはならない出来事が存在したことも知った。

なぜ、「ハンセン病」というだけで、差別を受け理不尽な思いをしなければならなかったのだろうか。ハンセン病の方も病気のこと、自分自身のことを分かってもらうための努力をしてこられたのだ。その努力は無駄だったのだろうか。いや、違うのではないかと私は思う。なぜなら一方的な勝手な思いかもしれないが、ハンセン病であるがゆえに、不当な差別を受け、偏見の目にさらされたという負の歴史の中でも、懸命に生きてこられた方々の証がここにある。偏見や差別は同じ人間がつくりだすものだということ、誰の心にもいとも簡単に

住みつく感情であることを身をもって私に語りかけてくれているからである。

「星塚敬愛園」は、私にとって、無知というものがどんなに恐ろしいことなのか、偏った情報でしか物事を見ないことや何の疑問も抱かず生きていくことが大きな差別や偏見を生むことを教えてくれた。かけがえのない場所である。と同時に、私が、自分自身に問いかけた答えがそこにあつた。それは「理不尽なことには屈することなく努力し続けること。それが人を愛える大きな力になることであり決して無駄ではない」ということである。さらに、歴史は忘れ去られるものではないことにも気付かせてくれた。過去にあつたこととして、終わつたこととして封印されてはならないのではないかと私は思う。本当の苦しみや悲しみは絵や文字で描けるものではない。当事者の声を語り継ぐこと。記憶をつなぐことで、次の世代へと受け継がれると私は強く感じた。

私はもう一度誓う。「私は忘れない。そして事実が事実として受け止め、つないでいくことを。そのために、今を生きる私は、努力し続けることを」。園内を去るときに、入所されている方がこやかな笑顔で挨拶をして下さった。その笑顔に私はそう誓った。

新聞掲載

宮崎日日新聞(12月6日掲載)